

『播磨国風土記』の中心地、加西市から生まれた 新作能『針間』と新作狂言『根日女』

市長 「加西市播磨国風土記1300年祭」の総合プロデューサーとして、ご多忙を極める中お骨折りいただき、本当にありがとうございます。日本を代表する能楽笛方の藤田六郎兵衛さんだからこそ、超一級の演者はもちろん、梅原猛先生や野村萬斎さんのご協力が得られたのだと痛感しております。ここ数年、何度も加西市にお越しいただきありがとうございます。藤田さんは加西市について、どんな印象をお持ちでしょうか。

加西市は、古代からの歴史を刻む心豊かで美しい豊饒の地

藤田 初めて加西市を訪れたのは、あたりの田圃が黄金色に染まった秋でした。やさしい陽の光を受けて輝く稲穂の美しさ。その中を二両だけの北条鉄道の列車が、カタコトと走っていました。ああ、加西市というところはお米がたくさんとれる、豊かで美しい地なんだ、と実感しました。この豊かな土地で皆さんは、長い歴史を育んでこられたんですね。酒好きの私は、おいしい日本酒も飲める、とうれしくなりました(笑)



市長 2年ほど前、県立フラーセンターに移動式の能舞台を設置して、藤田

市長 加西は県下有数の米の産地で、数々のコンテストでも優勝しています。日本の酒づくりは、良質な酒米ときれいな水があつてこそですから、酒米の王者山田錦も加西の酒も、市民の自慢です。古代にさかのぼれば、こちらにも県下有数の大きさを誇る古墳や、大化改新以前に創建された寺社もあちこちに残っています。現在も尊崇されています。

藤田 僕は能楽笛方の家に生まれ、お稽古を始めた4歳のころから、室町時代の伝統のなかで生きてきたようなところがあるんです。ですから、加西市ののどかな風情がなつかしく、心安らぐ感じがしました。

市長 子どもたちのオーディションのために加西市に来ていただいたのは、昨年の桜の季節でしたね。

藤田 春の玉丘史跡公園の美しさは格別で、来年の5月には、ここで子どもたちが『根日女』を披露するんだなあ、と感



西村 和平 加西市長

概深いものがありました。

市長 いよいよ5月4日の「加西市播磨国風土記1300年祭」も目前です。

藤田 オーディションで選ばれた加西市と播磨地域の5年生、6年生27人の「加西市子ども狂言塾」の塾生は、本当によく頑張りました。それを懸命に支えて下さった「応援隊」の皆さまにも、心から感謝いたします。

市長 1年かけて稽古してきた現在の6年生が卒業すると、新6年生に新5年生が加わり、『根日女』の稽古は続きます。平成の世に誕生した「ふるさと」の狂言を、ぜひ加西市に根付かせたいと思っています。

藤田 昨年4月の稽古はじめのときには、板の間に正座することも、大声で挨拶することもできなかった子どもたちが、プロの狂言師の指導を受けて、なんと国立の能楽堂で謡と小舞を披露しました。講演していただいた梅原猛先生に、きちんとご挨拶する姿を見て、客席の婦人が涙ぐんでいらっしゃいました。



東京・国立能楽堂の舞台上で1年間のお稽古の成果を披露した「加西市子ども狂言塾」の塾生たち。

**1300年のときを超えて
地元の物語が能と狂言になって蘇る**

市長 3月16日の子どもたちの堂々たる姿を見て、5月4日の「本番」に一層の期待を寄せています。記者会見の後に、哲学者の梅原猛先生に書き下ろしていただいた新作能『針間』のハイライト部分が披露されましたが、その反響の大きさに、私自身、大きな喜びと驚きさえ感じました。梅原先生は、自分が書き下ろした能『針間』を、二人の皇子のゆかりの地で上演できることこそ、実に素晴らしいとおっしゃって下さいました。

藤田 梅原先生は、『針間』は自分の代表作になるだろう、ともおっしゃいました。現代語の能ですので、ご覧になる方は、とても理解しやすいと思います。

『針間』に登場する「おけ」と「をけ」の二人の皇子は、牛飼いから帝になった兄弟です。兄は気のいい優しい男、弟は、自分の現状に我慢できないいきいきな男。まったくキャラクターが違いながら、お互いを思いやる愛を持っていきます。梅原先生は、奴から帝になった例は皆無だろう、ともおっしゃっていましたね。

市長 これから帝になる兄弟の皇子を演じる大槻文蔵氏と裕一さんは、芸の上で親子になられたんですよ。皆さん日本有数の能楽師です。

藤田 裕一君は、文蔵先生の芸養子になったんです。昨年「人間国宝」に



梅原猛氏による新作能『針間』の解説。

なられた梅若玄祥さんの舞も華やかです。地謡の地頭を勤めていただく観世鏡之丞さんも、力強い謡には定評があります。加西市から誕生した新作能『針間』が、近い将来、播磨の各市町や、国立能楽堂でも上演されることを期待しています。

市長 「加西市播磨国風土記1300年祭」の取り組みは、100年に一度の文化的大事業だと考えております。この事業の成果を、加西市民の幸せへとつなげていきたい、と思います。

藤田 文化行政は一朝一夕で成し遂げられるものではありません。現代人は、目の利潤ばかりを追求しがちですが、本当に大切なのは人々の心の豊かさだと思います。それが子どもたちに希望を与え、子どもたちの未来を創ると信じています。その意味で、『播磨国風土記』編纂1300年を軸に、こうした画期的な事業を推し進められた西村さんに、敬意を表します。

市長 ありがとうございます。加西市(賀毛郡)を舞台上に青春を生きて帝になった皇子たちと根日女の物語を、日本



3月16日東京・国立能楽堂で記者発表。



3月16日東京・国立能楽堂で披露された新作能『針間』から。